

## 古代史シリーズ6

# 「古代大和を創った鉄と海路」



本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

古代史シリーズ6では、大和を創った天皇と渡来人を鉄と海路から探って行きます。世界の歴史の中で最も大事にされた金属に鉄があります。覇権のための武器として、文明・文化を育む機器や器具としてすべての国で活用されました。日本においても例外ではありません。

著者：情報戦略モデル研究所

井上 正和



はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前コメーカーのSDやコンサルタントが専門でした。十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀(以降は「記紀」という)が読めなかったり、古代史は良く分からないと思われるのは、初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれない。また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元SDとしてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれない。

古代史シリーズ6 「古代大和を創った鉄と海路」では、大和を創った天皇と渡来人を鉄と海路から探ります。世界の歴史の中で最も大事にされた金属に鉄があります。覇権のための武器として、文明・文化を育む機器や器具としてすべての国で活用されました。日本においても例外ではありません。大和を創った天皇と渡来人を鉄と海路から探って行きます。本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキ、ディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

- ＋「古代の謎は「鉄」で解ける」(長野正孝著、PHP)
  - ＋「古代の謎は「海路」で解ける」(長野正孝著、PHP)
  - ＋「古代の技術を知れば、「日本書紀」の謎が解ける」(長野正孝著、PHP)
  - ＋「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)
  - ＋「古事記」(竹田恒泰著、学研)など
- 本冊子の古代史シリーズ6 「古代大和を創った鉄と海路」の全体構成は次の目次にあげて置きます。

# 古代史シリーズ6 「古代大和を創った鉄と海路」の目次 ◎

第一章 「鉄の伝達と航路」	4
鉄の伝搬ルートと倭国大乱の時代背景を抑える。	
第二章 「日本海航路と出雲・丹後・敦賀」	14
日本海航路の拠点である丹後と敦賀の鉄伝搬ルート拠点と大和の繋がりを知る。	
第三章 「倭の五王と高句麗との戦い」	28
高句麗との戦いと倭の五王時代の時代背景を知る。	
第四章 「雄略・継体天皇の大和統一」	41
秦氏等渡来系の民と応神・雄略・継体天皇の戦略を知る。	
第五章 「大和の古墳群と鉄の路の神」	55
大和の古墳群の意味と記紀の神々と鉄の路の関連を探る。	
おわりに	69

◆第一章 「鉄の伝達と航路」の目次

第一話 鉄の伝搬と時代背景……………5

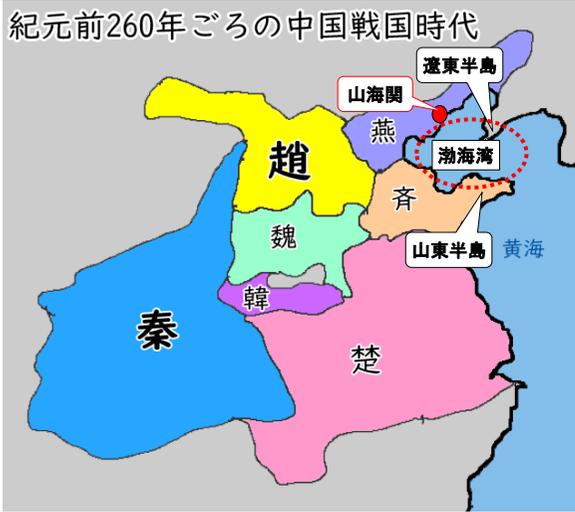
第二話 鉄の運搬ルート……………7

第三話 倭国大乱の背景……………9

コラム…「スキタイ国の鉄」……………12

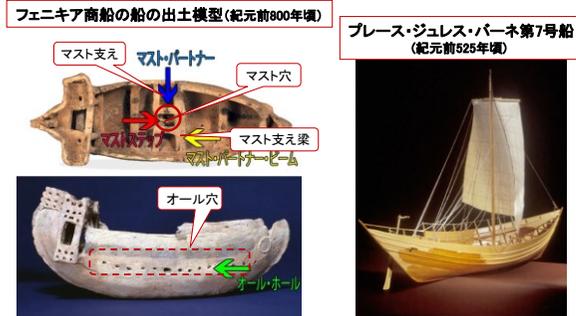
### 参照資料1-1:春秋戦国時代(B.C400-230)

(注記) 中国の紀元前後の動き 出典:ウイキペディア  
 春秋戦国時代(BC400)⇒秦(BC221)⇒前漢(BC202)⇒新(AD8)⇒後漢(AD25)



### 参照資料1-2-①:古代地中海の帆船

出典:ウイキペディア

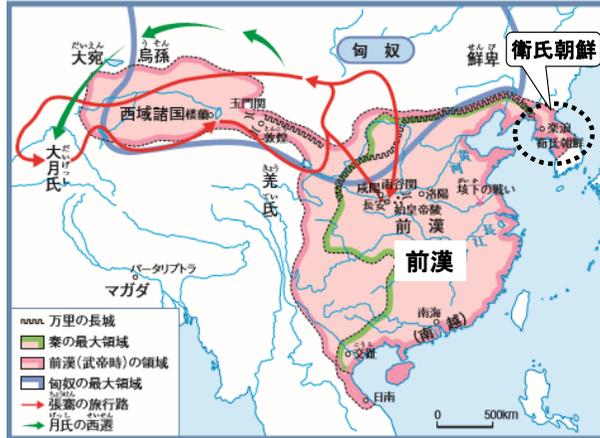


当時の中国(前漢)は朝鮮半島(渤海湾を渡る手段もなく、朝鮮半島には無関心であった。秦の始皇帝を始め、万里の長城が海に落ちる山海関(さんかいかん)から東には関心がなかった。前漢の武帝(BC110年在位)の時代、西方の匈奴討伐の結果、中国と西方の通商路が開け西欧やインドから多くの知識・文物がシルクロードを通して伝わるようになった。その中には帆船の技術もあった(参照資料1-2-①)。地中海の国々では紀元前六〇〇年頃には帆船が作られ活動していた。その技術を使えば渤海湾(ぼっか

第一話 渡来人のうねりと時代背景

鉄が倭国へ伝えられるのは紀元前後に遡る。その時代は紀元前三世紀の中国、周代の「戦国の七雄」の一つである燕(えん)が朝鮮半島を治めている春秋戦国時代である(参照資料1-1)。朝鮮半島で鉄が作られ始め、日本にも流れ始める。紀元前一九四年、朝鮮半島に中国人(燕・斉の亡命者)と原住民の連合政権「衛氏朝鮮」が建国される。王險城(おうけんじょう)を築き、現在の平壤を首都とし、鉄資源を保有した。鉄資源が中国でなく朝鮮から伝わり始める背景は中国朝鮮の時代を抑える必要がある。当時の中国は春秋戦国時代であり、戦国の七雄といわれる国家が林立していた。戦国の七雄は、秦・楚・斉・燕・趙・魏・韓の七国で争いがつづき、紀元前二二一年に秦の始皇帝が全土を統一し、戦国時代は終結する。その後、前漢が興り、前二〇二年に覇権が移る。

## 参照資料1-2-②:前漢と衛氏朝鮮(B.C195)



出典: ウィキペディアから原図引用

いわんを渡れるようになる。紀元前一〇九年、武帝は水軍を結成し、海と陸から衛氏朝鮮を攻め滅ぼす。中国に鉄資源(精錬・製造施設も含む)をもたらし、朝鮮を植民地支配し、鉄を得てからの前漢は侵略国家に変わると言われる。高句麗およびその前身である扶余(ふよ)も遊牧民と言われる。朝鮮半島への製鉄技術が中国に先んじたのはそういったところにあるのかもしれない。(注)詳細はコラム参照。

当時の鉄は覇権を得るための最も重要な金属であり、権力の象徴でもあった。生産量も少なかったため貴重品である。前漢(BC111)では当初、この鉄は前漢が国家統制し、周辺の友好国には恭順させるための贈答品として贈られた。威力のある長剣、素環頭鉄刀(すかんどうてつとう)などは倭や辰韓に、短剣は高句麗など周辺国に贈られた。日本ではこの贈答品である素環頭鉄刀などの鉄製品が日本海側と北九州で出土する。日本への鉄のルートは、倭人の道(北九州)、高句麗の道(日本海)の二つの路があった。

## 第二話 鉄の運搬ルート

前漢の武帝が朝鮮半島の鉄を抑えた後、朝鮮半島の楽浪郡では鉄の交易を管理・統制し、製鉄技術を秘匿していたが、周辺民族に襲われ、そのたびに鉄の鍛造技術は拡散することになる。倭国への運搬は高句麗の遊牧民が略奪した鉄を朝鮮半島の中央の太白山脈を通って東海岸を馬で運んだと「魏書 東夷伝 高句麗条」に記述する。このルートは「高句麗の道」と言われ、リマン海流を利用して運搬することになる。もう一つは、倭人が半島の西海岸を船で対馬・壱岐経由で運ぶ「倭人の道」であり対馬海峡を活用する。各ルートの存在はそこに存在する遺跡によって検証することができる。

まず、「高句麗の道」からみてみよう。このルートでは弥生時代後半から末期の墳墓では剣や鉄器が出土する。丹後、播磨、但馬、越前、上野の方が北九州より多いと考古学者の野島永氏は語る。また、伯耆(ほうき)の国(鳥取県)では、遼東半島で作られた鉄器(BCの500年前後)が運ばれている。いままで九州しかないと言われていた素環頭鉄刀が出土する。妻木



晩田(むきばんだ)遺跡、青谷上寺地(あおやかみぢち)遺跡からは四百点以上の鉄器が出土した。この事実は日本海側沿岸では古くから朝鮮半島との交流があり、これらの地で鉄器生産が行われていたことを物語る。鳥取以北に朝鮮半島から交易を持つためには經由地が必要になるが、リマン海流から対馬海流に乗って經由するに好都合な島、「隠岐の島」があった(参照資料-3.4)。

この隠岐の島には二百基もの円墳・角墳が混じった墳墓がある。倭国大乱の時代に多くの漂着民がこの地に漂着した。また、縄文時代から朝鮮南

部から隠岐の島・出雲の航路があつたことが分かっている。弥生中期以降、一世紀頃から始まる半島との「鉄の道」は四世紀ごろ敦賀への海路ができるまで北限が丹後半島になる。隠岐の島の西ノ島町(海(あま)神社の例祭には「船渡御祭(ふねとぎよまつり)」が残る。この地が鉄の道の中継港であつたことが分かる。

弥生中期後半になると、日本海から土笛陶埴注(とうけん)が消える。陶埴とは鉄とともに古代中国から伝わった楽器であるが、音はひどく、祭祀や船乗りの汽笛で使用されたと思われる。交易の盛んな日本海沿岸地区から消えるということは土笛陶埴を使わない民族が来たということかが想像できる。その民族が丹後の「黒曜石等の路」を「鉄の路」に変えた民族である。

一方、「倭人の道」は、朝鮮半島西海岸から対馬・老岐を通り北九州へ鉄を運搬するルートである。紀元前三世紀から紀元二世紀に活動した北部九州、福岡県糸島市井原鑪溝(やりみぞ)遺跡、佐賀県唐津市の桜馬場(さくらば)のばば遺跡などでは鍛冶(たんち)技術が発達した。鍛冶技術とは、鍛冶(かじ)の技術であり、金属を鍛錬して製品を製造する技術である。近くに伊都国(いとこく)の王都、三雲南小路(みくもみなみしょうじ)遺跡(鉄剣や多量の銅鏡が出土)とは同時代であり、多くの甕棺墓(かめかんぼ)から鉄器が出土する。輸入された質の良い鉄剣(素環頭鉄刀)は副葬品として埋葬されたと考えられる。同時期、老岐の原の辻遺跡、加羅神(カラカミ)遺跡から農耕具や武器、狩猟漁撈用鉄器、精錬炉跡などが出土する。朝鮮半島から対馬・老岐を経由し、北九州で普及したことが明らかになる。

倭人とは、九州、西日本の島嶼部(とうしよぶ)・小島(こ)と、朝鮮半島の西部海域から遼東半島までの海域を活動していた海洋民族であり、同じ人種ではなく、日本海を渡る知恵と技術を付け、海で助け合うことが宿命づけられた仲間たちで、西洋のハンザ同盟のような都市連合であつたと考えられる。倭人の居住する地域が海岸線に沿って広く分散するということとは異なつた人種であると考えられるからである。

朝鮮半島との交易で倭国から提供できる産品は三世紀の卑弥呼の時代前まで勾玉、翡翠(糸魚川)、黒曜石(丹後)などを持ち寄り、弁韓(へん)年に数度渡海しました。倭国が渡航した時期は、旧暦の四月(六月)に集中しており、寒い時期の九月(新暦の九月下旬)から一月はありません。倭寇として新羅を襲撃した時期を「三国史記」に記述していることから分かります。

### 第三話 倭国大乱の背景

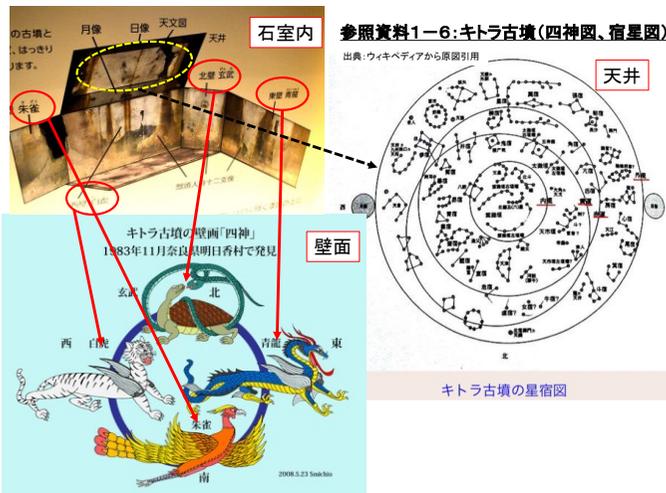
魏志倭人伝に倭国大乱の記述がある。そこには、後漢の桓帝(かんでい)、靈帝(れいでい)の時代(187年から189年)頃、倭国は長らく乱れ、何年も攻め合った。そこで、一人の女子をとものに王に立てた。名は卑弥呼……と記述される。倭国大乱の記述は魏志倭人伝以外に記述はない。当時の中国(後漢から魏)は、東海岸で起き始めていた高句麗の南下情報は把握していなかった。

東夷伝によれば、倭国大乱のきっかけは、西暦三七年、高句麗が楽浪郡を突然侵略し、さらに朝鮮半島の東海岸まで達する。高句麗の侵攻で朝鮮半島の北半分は高句麗領になり圧政が始まる。東沃沮(ひがしよんそ)や濊(わい)の住民は難民として南下し、一部はポートピアルとして海に逃れた。難民となった彼らは、リマン海流から対馬海流に乗り日本海に出て出雲や丹後半島界隈に漂着した。高句麗は扶余(ふよ)の王族朱蒙(しゅもう)が、前三七年に建国したが、扶余、高句麗、東沃沮、濊は遊牧民で騎馬を得意とする同系統の種族である。扶余国の末裔が高句麗と百濟を作ったと言われる。参照資料1-5では、前漢が注玄菟郡(げんとぐん)として属領としていた時代、高句麗は未だ存在せず、その北方を扶余国が占めていました。(注)漢の武帝の朝鮮遠征によって衛氏(えいし)朝鮮が滅ぼされ、その結果設置された朝鮮四郡(漢四郡)の一つ。

参照資料1-5: 高句麗の南下



出典: 図説ユニバーサル新世界史資料



キトラ古墳の星宿図

参照資料1-8:但馬・丹後文化圏



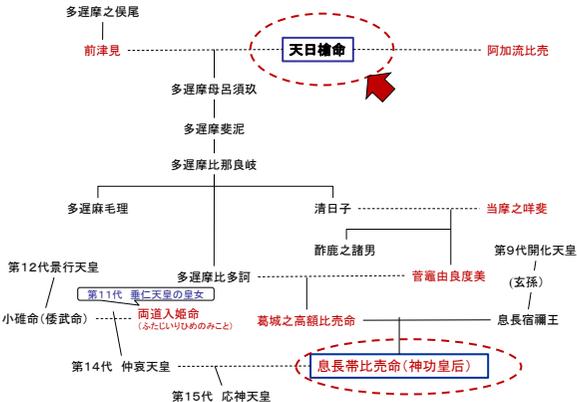
参照資料1-9:淡路島(1世紀ころ)鍛造図



この遊牧の民の中に、「播磨風土記」に記述され、史実として残る王侯貴族、天日槍命(アメノヒボコノミコト)が出てきます(参照資料1-7)。そこには、一世紀前半に「新羅の王子が突然播磨に来て、淡路島を占領した。ちなみに、天日槍命の末裔に日本書紀に取り上げられる神功皇后(じんぐうこうこう)がいます。三韓征伐の後、第十五代天皇の応神天皇を生みます。応神天皇は八幡神の総本山である宇佐神宮の主祭神になり、倭の五王の初代とも目される天皇です。話を天日槍命に戻しましょう。「天日槍命は地元の勢力と争って但馬の円山(ま

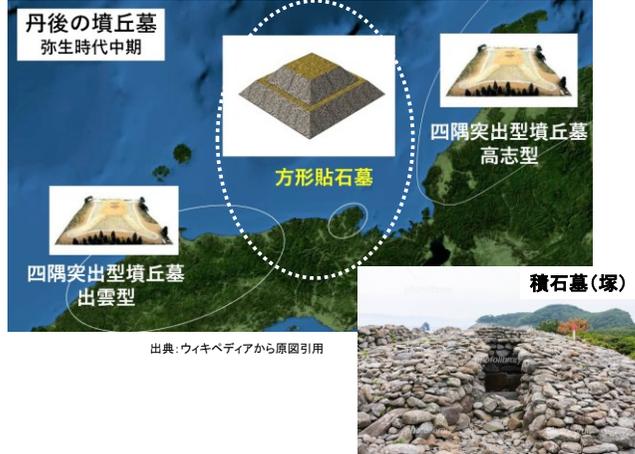
るやま)川流域を支配し、豊岡の出石(い

参照資料1-7:天日槍命(アメノヒボコノミコト)と神功皇后



ピープルとして難民が渡ってくる」と同時に、朝鮮半島からの依頼も受け倭の五王時代にになり、強力な軍事力のもとに半島への基盤を作ることになりました。このポートピープルには、王侯貴族が多く含まれ移住してきます。紀元前からの倭との交易関係があり、移動・移住しやすい国であったと思われま。キトラ古墳もそういった渡来人の遺跡です(参照資料1-1)。キトラ古墳は遊牧民の脳(思考)と行動様式を表しています。キトラ古墳の壁面の東西南北を示す青龍(せいりゅう)、白虎(びやくこ)、朱雀(すじゃく)、玄武(げんぶ)の四神図と天井に宿星図(しゆくせいず)が描かれています。この四神図と宿星図はこの塚の主が黄泉の国で数百、数千の家畜を連れて旅する時、欠かせない位置情報を表しているのです。草原の塚と夜の星座は自分の位置と進むべき道を教えたのです。倭の国に移住してきた難民が遊牧の民であることを表しています。

### 参照資料1-10: 日本海の方形貼石墓と積石墓



出典: ウィキペディアから原図引用

瀬戸内海側にかけて分布する。そして、古墳時代になっても増え続ける。間断なく漂着難民が来た。この貼石墓は夜中でも月明かりで光り確認ができる。遊牧民には道しるべや民族の存在を示す目印であった。現在の中国東北部と北朝鮮に位置した夫余や高句麗系の遊牧民の墳墓と酷似する。

づし)にも拠点を置いた」と記述されます(参照資料1-8)。朝鮮半島の一世紀前半に高句麗が朝鮮半島に侵入した動きとこの天日槍命の移住時期は一致しています。淡路島に一世紀ごろの製鉄遺跡「五斗長垣内(ごつかい)と遺跡」が鍛造製鉄所として操業していた事実が確かめられている。円山川から市川、揖保川(いぼがわ)まで抜ける最初の畿内への鉄の道が出来ていたことになる。詳細は第二回配本に譲る。また、播磨に来襲した王子は風土記に記述されているような新羅の王子ではない。なぜなら当時、新羅という国はない。濊(わい)の部族のポトピープル(漂着難民)であろうと言われている。

この時代を境にして鉄の副葬品を有する異形墳墓が大量発生する。積石墓(つみいしぼ)、円墳の増加である。世紀前の日本の墳墓は土壙墓(どこうぼ)、中国・朝鮮の影響を受けた甕棺(かめかん)、周溝墓(しゅうこうぼ)、支石墓(しせきぼ)などがあつた。一世紀ごろ、全国的に今まで見られない積石墓が増え、後に円墳が増え始める。丹後では紀元前100年から紀元100年頃に大多数の光る方形貼石墓(はりいしぼ)ができる(参考資料1-10)。古墳時代の吉備や大和では貼石を葺石(ふきいし)といい、円筒埴輪も配した墳墓になる。これらの墳墓は鳥取県より東の海岸、河川から

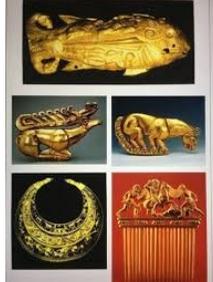
## 参照資料1-11:スキタイ国の金属文明



スキタイ軍隊(想像)



出土品



出典:ウィキペディアから原図引用

## コラム:「スキタイ国の鉄」

騎馬遊牧民であるスキタイ人の文化は、騎馬の技術、馬具、武器に施された動物紋などが特徴である。紀元前一千年頃から中央ユーラシアに広く影響を与えた。

前七世紀から前六世紀のスキタイ人の首長を埋葬した墳墓(クルガン)が発掘され、おびただしい金製品が発見された。とくに多くの枝に分かれた角を持つうずくまった鹿や豹や、さまざまな姿勢で戦う猛獣を組み合わせた、「動物意匠」と言われる形態をとる金や青銅の製品は、スキタイ文化の高度な到達度を示している(参照資料1-11)。彼らの文化は草原の道(ステップロード)を経て東方にも広がり、中央アジアの、パミール高原の東西からモンゴル高原、

中国北部にも及んでいる。その全盛期は前六〜前五世紀ごろであった。ユーラシア大陸の騎馬民族として最初に登場する民族であり、スキタイ文化は西アジアのヒッタイトなどから鉄器の製造を学び、それを東方に伝え、他の遊牧騎馬民族に大きな影響を与えた。

ヒッタイトとは、インドヨーロッパ語族に属する一民族で、前千九百年頃、西アジアに起こった広範囲な民族移動の動きの一つとして東方から小アジア(アナトリア)現在のトルコに移住し、既にその地で始まっていた鉄器製造技術を身につけ、有力になったと考えられている。

ヒッタイト人は独自の製鉄技術を発達させ、武器や実用品として鉄器を製造したが、彼らは鉄製の車輪を二頭の馬にひかせる戦車(チャリオット)を発明し、周辺諸国との戦いを極めて有利に進めた。ヒッタイト人は製鉄の技術を秘匿していたといわれ、それによって勢力を伸ばした。しかし、前千二百年頃、「海の民」の侵入を受けて滅亡したと思われるが、その事情はわからない点が多い。

ヒッタイトが滅亡したことによって、独占していた鉄器製造技術が、西アジアから東地中海一帯へ拡散され、文明段階の青銅器時代から鉄器時代へと移行したと考えられている。最近二〇二七年、考古学

者の故大村幸弘氏によつて、この地で前二千二百年前の地層から製鉄が行われていたことが確認されている。この製鉄技術が紀元前後に遊牧民によつて伝達されたということになる。

以降省略

## 参考図書

- 十「古代の謎は「鉄」で解ける」(長野正孝著、PHP)
- 十「古代の謎は「海路」で解ける」(長野正孝著、PHP)
- 十「古代の技術を知れば、「日本書紀」の謎が解ける」(長野正孝著、PHP)
- 十「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)
- 十「古事記」(竹田恒泰著、学研)など

おわりに

従来の日本の古代史は、全ての渡来人、大陸からの新しい技術は対馬海峡を通り、北九州、瀬戸内海を経て大和に入り伝えられたというのが主流でした。このシリーズで取り上げた長野正孝氏による「古代の鉄の道」に関わる三巻の著作物は新しい古代史の切り口を与えてくれたと思います。湾港技術者と言う専門性があつたことで技術的な観点から古代の航路を解析され、考古学の裏付けをされたことがその要因にあると思います。

瀬戸内海航路が開発される前に日本海航路が主流であつたことが具体的に解説され、妥当性を持つて受け入れることが出来ます。帆船や羅針盤等の航海技術ができるまで丹後半島を横断する運河があり、この半島を中心としたタニワ王国の存在があつたことを裏付けられた卓見には驚かされます。記紀にはこの王国の記述はありませんが、第十一代垂仁天皇の後、日葉酢媛命(ひばすひめのみこと)がタニワ大国の姫であり、大和朝廷との緊密な関係があつたことは記紀に記述されています。そして、高句麗との戦いが倭の五王時代を作り、瀬戸内海航路を開拓させ、第二十一代雄略天皇の時に完成を見たとする論理は納得させる視点である。

このシリーズをまとめてみると、大和は五世紀の第二十一代雄略天皇を境として、日本海航路が瀬戸内海航路へと中心を移していることが分かる。日本海航路での河・川・湖を使った水回廊によって交易がなされたことは、瀬戸内海航路の啓開は技術的に大変なものであつたことを伺わせる。

ここで筆者は疑問が出た。神武天皇が元前六六〇年に建国された大和は神武東征による帰着である。神武天皇(イワレビコ尊)時に瀬戸内海航路がなかったとすれば、日本海航路が使われたことになる。纏向遺跡が三世紀で日本海航路を歩つて北九州からも伝播された事実があり、紀元前には纏向遺跡の近くに物部氏の布留(ふる)遺跡が発掘されている。神武東征にイワレビコ尊は塩土の翁から物部氏の祖であるニギハヤヒ命が高天原から既に降臨していることを知らされる。

神武東征の各地にその謂れ、遺跡が残っているのも事実である。そうすると、長野正孝氏の筋書きにあるように、瀬戸内海航路を作つた古代人の経験が神武東征に反映されて記紀に記述されたのであろう。

長野正孝氏の視点は鋭い指摘であるが、古代大和の創生にはもつと深い別の視点が必要かもしれない。

## 【著者略歴】 井上正和(いのうえまさかず)

熊本大学工学部、九州大学大学院工学研究科卒業後、1971年日本IBM(株)入社しSE部門に配属。1992年、中小・中堅企業コンサルティング部門を立ち上げ、責任者としてコンサルティングプロセスの普及を図る。

2001年に独立し、有限会社 情報戦略モデル研究所を設立。

経営戦略やIT戦略の策定や構築に係る書籍出版、研修とコーチング支援、業務プロセス改善・改革に係る研修とコーチング支援などを多数手掛ける。2011年4月 神奈川工科大学で「情報と文化」講座で古代史講義を担当した時から、記紀を始めとした古代史に取り組み、素人の観点から古代史研究を開始し、現在まで16年間、16シリーズ(各5回講座)を開発し、古代史の講座を横浜市地区センターを中心に、学者ではない素人にでも分かる古代史セミナーを開催し好評を得ている。今後オンラインでの全国展開を計画している。

## 古代史シリーズ6『大和を創った鉄の海路』

発行日 令和7年8月吉日 初版発行

著者 井上 正和

発行所 有限会社 情報戦略モデル研究所

〒226-0006 横浜市緑区白山2-2-E-216

TEL:045-934-7254

URL: <http://www.ism-research.com/>

本書は、法令の定める場合を除き、複製・複写することはできません。

●本著の読者お問い合わせは下記を参照ください。

お問い合わせ: [ism.researchbook@gmail.com](mailto:ism.researchbook@gmail.com)

ISBN 978-4-9910882-9-2  
C1021 1000E

発行:情報戦略モデル研究所  
価格:本体価格 1,000 円+税



主な内容
はじめに 第1章 「鉄の伝達と航路」 第2章 「日本海航路と出雲・丹後・敦賀」 第3章 「倭の五王と高句麗との戦い」 第4章 「雄略・継体天皇の大和統一」 第5章 「大和の 5 大古墳群と鉄の路の神」 おわりに